

『イーヴァイン』における名詞 *mære* の用法 —— 押韻技法の観点から ——

武 市 修

はじめに

中高ドイツ語 (Mhd.) の *mære* は古高ドイツ語 (Ahd.) の *mâri* の幹母音 *-â-* が次音節の *-i-* のためにウムラウトし、その後、末尾母音 *-i-* が *-e-* に弱化した形であり、本来 *bekannt*, *berühmt*, *berüchtigt*, *beachtenswert* などの意味の形容詞であり、それが名詞にも転用された語である。その性に関しては、女性名詞として中部ドイツ語で、とりわけ14世紀前半ドイツ騎士団の司祭ニコラウス・フォン・イエロシン (Nikolaus von Jeroschin) が編んだ『ドイツ騎士団年代記』*Chronik des Deutschen Ordens* で非常に多く用いられているようであるが、すでに13世紀の聖者伝説集である *Das Passional* においても広く現われているし¹、『パルツイヴァール』*Parzival* にもわずかだが、次の例のように女性が見られる。しかしその他の地域、作品ではAhd.でもMhd.でもほとんど中性名詞として扱われた。もっとも、単複同形であるので冠詞が付かない場合、語形からは女性と中性の間、あるいは単数と複数の間を区別できないことが多く、また、それぞれの間の意味の相違があるのかどうかも不明である²。

hêr Parzivâl, wan sagt ir mir / unt bescheidt mich einer mære /
dô der trûrge vischære / saz âne freude und âne trôst, /
war umbe irn niht siufzens hât erlöst. (Parz. 315, 26-30)

(下線は筆者。以下同様)

1 Vgl. BMZ, II², 71.

2 マルティン (E. Martin) は『パルツイヴァール』2, 8の *disiu mære* に対する注で、複数には広く *Rede* 「何らかの発言」であり、単数もあり得るが、単数はとくに *die Geschichte, die Erzählung (die Fabel des Gedichtes)* を表わし、今日の *Märchen* であるとしているが、この区別についてもこの際検討してみたい。

パルツイヴァール殿、なぜそなたは私に話して教えて下さらないのか、あの悲しみに沈む漁師が喜びもなく慰めもなく座っていた時、なぜあの方を苦しみから救ってあげなかったのかを。

この例では1行目の *sagt mir* と2行目の *bescheidt mich einer mære* は同じ意味である。これは韻律を整え押韻するための類語反復³であり、ここでは女性名詞 *mære* にはほとんど意味がなく、次行の *vischære* と押韻するために用いられていると思われる。

『パルツイヴァール』ではこのように *mære* が女性名詞で現われることもあるが、しかしほとんどは中性名詞として、またその複数としても用いられ、押韻にも相当程度の役割を果たしている。それに比べ『ニーベルンゲンの歌』 *Nibelungenlied* では *mære* は女性名詞としては現われず、多くは中性の複数であり、しかも複数3格 *mæren* 8例を含めて全174例中、次の一個所しか行末にきていない。

Swie grimme und swie starke si in vîent wære,
 het iemen gesaget Etzeln diu rehten mære,
 er het' wol understanden, daz doch sît dâ geschach.

(Nib. 1865, 1-3)

彼女がたとえどれほど激しく彼らに敵意を抱いていたにせよ、
 もしも誰かがエツツェル王に本当の事情を話していたなら、
 その後に起こったことを彼は防ぎ止めていたであろうに。

このようにこの名詞は作品によって用法にずいぶん違いがあり、これから主要な叙事作品における用例を順次調べていく予定である。本稿では先ず、このような *mære* がハルトマンの『イーヴァイン』で如何に用いられているかに焦点を絞って、全用例をその前後関係から見て詳細に、また、押韻との関係も含めて検討したい。

この作品には *mære* は48度現われ、そのうち形容詞が3例、名詞は単

3 この表現技法はとくに『トリスタン』に多い。武市修『中世ドイツ叙事文学の表現形式』220ページ参照。

数、複数合わせて45例である。名詞 *mære* は冠詞や形容詞の付いた形で判別できる限りはすべて、女性ではなく中性の単数か複数である。辞書によれば、中性名詞 *mære* は最も広い意味で、口承によるものでも書いたものでも、直接であれ、第三者を通してであれ、一方的であれ対話によってであれ「人が他人に伝えるすべてのこと」を表わす⁴。考察を進めるに当たり、意味の違いおよび統語上の必要性によって次のような基準に従って分類し、単数と複数の違いも検討したい。

- 1) *Geschichte* の意味
- 2) *rhythmisch abgefasste Erzählung* の意味
- 3) *Kunde, Nachricht, Botschaft* の意味
- 4) *Ruf, Gerücht* の意味
- 5) 漠然とした *Auskunft, Bescheid, etwas* の意味
- 6) 統語上とくに必要でなく押韻に利用された *mære*

1. 人が他の人に語り聞かせる「話」*Geschichte* の意味の *mære*

これは *mære* 本来の意味なので、当然、用例も多い。まずは単数の例から見て行こう。

- 1) *der begunde in sagen ein mære, / von grôzer sîner swære, / von kleiner sîner vrûmekheit. (93-95)*
彼は自分の大きな苦難、自分の非力ゆえの失敗について彼らにひとつの話を語り始めた。
- 2) *nû bitet in sîn mære, / des ê begunnen wære, / durch iuwer liebe volsagen. (185-87)*
さあ、彼が先ほど始めた話をあなたのために最後まで語り終えるように彼にお願いしてください。
- 3) *ob daz selbe mære / wâr ode gelogen wære / (2533-34)*
あの話が本当なのか嘘なのか（確かめようと）
- 4) *Sus beginnet er trûren unde clagen / unde sînem gaste sagen /*

4 Vgl. BMZ, II², 72a, 12-17.

sô manec armez mære / (2845-47)

こんな風に悲しんだり嘆いたりして、客人にさんざん
哀れな話をするので、

最初のふたつは、物語の冒頭、アルトゥース王がある聖霊降臨祭に催した祝宴における一場面である。自分の冒険の失敗談を話し出したカーログレナントは王妃が戻ってきたのに気づき、話を中断して一人さっと立ち上がり礼儀正しく迎える。そのことで意地の悪いカイイーに嫌味を言われるが、それを王妃が聞きとがめてカイイーを非難する。カイイーは自分に対する矛先を転じるために、先にカーログレナントが始めた話を続けるよう王妃から頼んでほしいと言う。このふたつのmæreは彼が話し始めた冒険談のことであり、それぞれsagen, volsagenの目的語になっている。

3) はカーログレナントの冒険談を聞いて、ブレイリヤーンの森へ出かけてきたアルトゥース王が、泉の水を石にかけたら大嵐になったという話が本当かどうか確かめようとする場面である。このmæreを辞書は「噂話」の項目に分類している⁵が、daz selbe mæreはカーログレナントが語ったその話を、王妃が後から来た王に伝えたものを王が直接聞いた話なので、「噂話」ではない。

4) は森の国の城主に納まった親友にガーヴァインが、いなかの城主になって騎士道を忘れたら日常の生活にかまけ、客が来てもろくろくもてなさず哀れな話をするようになるという場面の一節である。上の4つの例ともmæreが行末に置かれ、その押韻相手はwæreである。

このような*Geschichte*の意味ではほとんど単数で、これ以外に6例ある。以下に列挙しておこう。

5) mîn vrouwe sol iuch niht erlân
irn saget iuwer mære; (226-27)

お妃さまはそなたにその話をするのを
免じてはくださらないであろう。

5 Vgl. BMZ, II¹, 73b, 45f.

- 6) ez ist mîn bete und mîn gebot
daz ir saget iuwer mære; (238-39)
そなたにその話を語ってもらいたい
というのが私の願いでもあり、命令でもあります。
- 7) wand im was komen mære
wie in gelungen wære : (3073-74)
なぜなら、彼らが如何に見事な手柄を立てたか
という話が彼のもとに届いていたからである。
- 8) Nû was im daz mære / durch sînen gesellen swære. (4303-4)
今この話を聞いて彼は友のために心が重くなった。
- 9) welt ir ein vremde mære
hæren, daz wil ich iu sagen. (4528-29)
もしあなたが奇妙な話をお聞きになりたければ
それを私がお話しましょう。
- 10) er erkand in bî dem mære,
und enweste doch wer er wære. (5697-98)
彼はその話によってその騎士のことを知ったが、
しかしそれが誰なのか分からなかった。

5)、6) は 1)、2) と同じカーログレナントの冒険談であり、これも単数であろう。7) は *mære* が主語になった例で、後に続く間接疑問文でその内容が説明される。イーヴァインとガーヴァインという当代屈指のふたりの騎士が比武の際にいかに卓越した腕前をみせたかという「話」である。冠詞が付いていないが、定動詞の形から単数であることは明らかである。Nhd. なら冠詞が付いて *die Geschichte* とでもなるところである。Mhd. ではこのように特定されたもの、既知のものでも名詞に冠詞が付かないことも多く、冠詞の用法も Nhd. と異なるところがある。確かにドイツ語の発達過程で定冠詞と不定冠詞の使用は増加し、無冠詞の用法は減少する。しかし Mhd. ではまだ冠詞の有無がどの程度名詞の規定と関わりがあるか、その都度正確に捉えるのは必ずしも簡単ではない⁶。

6 Vgl. Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 25. Auflage, neu bearbeitet von

8) の *daz mære* はアルトゥース王の妃がメリヤガンツに連れ去られたあとを、ガーヴァインが取り返すために追いかけていったという話で、それをルーネテから聞いてイーヴァインは友の身を案じる。

10) の *mære* は「獅子を連れた無名の騎士が巨人ハルピーンを倒して、巨人に苦しめられていたガーヴァインの姉一家を苦境から救った」ということで、騎士の希望で城主の娘が叔父のガーヴァインに伝えた話である。この例文については後にまた触れることになる。これらの用例でも8) と9) 以外は *mære* は *wære* と韻を踏んでいる。

Geschichte を意味する *mære* は複数でも次のように4例見られる。

11) *diu mære der ich laster hân,*

daz ich diu niht kan verdagen: (796-97)

そのために私が恥辱を受けるような話を
黙っていることができないとは、

12) *diu künegin saget im her wider / Kâlogrenandes swære /
und älliu disiu mære. (890-92)*

王妃は王に改めてカーログレナントの受けた苦難を
そしてこの話の一部始終を語り聞かせた。

13) *Der mære vreute sich diu maget. (5855)*

この話を聞いて乙女は喜んだ。

14) *sus vertriben sî beide / mit niuwen mæren den tac. (6078-79)*

こうして彼らふたりはいろいろなことを話して時を過ごした。

11) の *diu mære* は例1) にあったカーログレナントの「話」であるが、ここでは複数で関係代名詞の先行詞となり、Nhd. と同じように、規定されたものとして定冠詞が付いている。そして次の *daz* 文中でさらに複数の指示代名詞 *diu* で受け直されている。なぜこれが複数でなければならぬかは分からない。単数にすれば、冠詞と指示代名詞の形は変わるが、意味は変わらないし、韻律上も同じである。ただ、単数の *mære* は

他の例も含めてすべて行末にきているが、複数の *mære* はここでは4例中3度行中に現われている。12) の *disiu mære* も11) と同じ話であるが、この *mære* は行末に置かれている。

13) は黒茨伯爵の遺産をめぐる姉妹の争いについての挿話中の一場面である。代理の戦士として獅子を連れた名の知れぬ騎士を探しあぐね病気になった妹姫が、親戚の城主の元に身を寄せ、代わりにその娘が騎士を見つける旅に出る。この *Der mære* は、その娘が立ち寄った城の城主である、ガーヴァインの姉一家を巨人ハルピーンの暴虐から救った顛末のことである。『イーヴァイン』にははっきり女性と分かる *mære* は1例もないので、ここは中性の複数2格であろう。

14) では、この娘がようやく探していた騎士を見つけ、伯爵の妹姫の望みを叶えるべくアルトゥース宮廷に向かう道中で、一夜の宿を借りたある城の中でふたりがいろいろなことを語り合って夜を過ごす。ベネツケ (G. F. Benecke) によれば *mit niuwen mæren* は *mit mannigfaltigen Gesprächen* の意味で、本来はヴォルフラム (Wolfram von Eschenbach) によく見られる表現ということである⁷。

2. 韻律を整えて作られた物語 *rhythmisch abgefasste Erzählung* の意味の *mære*

mære は上で見たような話、冒険談から「韻律を整えて作られた記憶に値する出来事の物語」でもある。辞書によればこの意味では、中性の単数と複数があるということである⁸が、この作品にはその意味の *mære* は次のように単数で2例見られる。

- 15) er was genant Hartman / und was ein Ouwære, /
der tihte diz mære. (28-30)

彼はハルトマンという名で、アウエの人であった。
その人がこの物語を作ったのである。

7 Vgl. Anm. zu 6079 von Benecke.

8 Vgl. BMZ, II¹, 74a, 14ff.

- 16) ichn wolde dô niht sîn gewesen, / daz ich nû niht enwære, /
 dô uns noch mit ir mære / sô rehte wol wesen sol: (54-57)
 私は今こうしてここにいないであの時代にいたかったとは思わな
 い。今でも我々は彼らの物語を聞いて十分楽しめるのだから。

15) は作品のプロロークで語り手が作者について紹介する部分で、この mære はこれから話を始めるこの物語のことであり、ここでは前行の *Ouwære* と韻を踏んでいる。なお、2行目 *tihte* は本来は動詞 *tihten* (= *nhd. dichten*) の過去形であるので、*tihtete* となるべきところであるが、強弱のタクトを整えるために同じ音節の *-te* がひとつ省かれた語中音の消失した形であり、Mhd. の韻文では広く見られる短縮形である⁹。

16) は、これから話を始める騎士たちの時代がすばらしいものであり、今では当時の宮廷の楽しみは夢となったが、それでもあの時代に身を置いてその楽しみを享受したいとまでは思わない。今でも当時の彼らの物語を聞いて楽しめるのだから、と語り手が言う昔の騎士物語である。

3. 「知らせ」や「情報」*Kunde, Nachricht* の意味の mære

mære はまた、次のように *Kunde, Nachricht* 「知らせ」や「情報」を意味する。この意味では複数が多く、単数では筆者の見るところ3例で、残りの7例は複数である。先ず、単数の用例から見よう。

- 17) als sî mit bœsem mære / zuo im gesendet wære. (2219-20)
 まるで悪い知らせをもって彼の元へ送り出されたかのように
- 18) ichn hôrte dô ze hove sagen / von iu dehein daz mære /
 daz iuwer iht wære. (4272-74)
 アルトゥース王の宮廷ではあなたの消息について、
 いかなることも聞けませんでした。
- 19) done hete sî dehein mære / alsô gerne vernomen. (8028-29)
 彼女がこれほど喜んで聞いた知らせは未だかつてなかった。

9 武市修、第二部第4章第4節参照。

17) は次のような場面からの一節である。ラウディーネの侍女ルーネテは主君アスカローンがイーヴァインに討たれたあと、妃に一目ぼれした彼を見て女主人と結び付けようと策を練る。彼女はイーヴァインを夫の仇と憎むラウディーネを何とか説き伏せてふたりが会う算段を整える。イーヴァインのところへ嬉しい知らせをもっていったルーネテは、彼の愛する想いをいっそう募らせるため、悪い知らせをもってきたかのような振りをする。

18) は「私はあなたの消息について宮廷では何の話も聞けなかった」という意味の持って回った言い方である。これをクラーマー (Th. Cramer) は „*Ich hörte am Hofe keinerlei Nachricht von Eurem Verbleib.*“ と訳し、ヴェールリ (M. Wehrli) もほとんど同じように „*Ich hörte da am Hof keinerlei Nachricht von Euch.*“ と訳している。この *dehein* に当たる *kein* が冠詞とともに用いられることは Nhd. ではあり得ないが、Mhd. ではそれほど稀なことではない¹⁰。19) では *dehein* は稀に複数名詞に付くこともないではないが、ここはとくにそう考える理由はない。

次に複数と見られる例を挙げると、

20) *dem brâhtes bæsiu mære, / daz ir vrouwe wære /*
unbekêriges muotes: (1995-97)

彼にルーネテは女主人が考えを変えないという
悪い知らせをもって行った。

21) „*waz mære hâstû vernomen?*“

„*guotiu mære.*“ „*sage doch, wie?*“ (2206-7)

「どんな知らせを聞いてきたの。」

「よい知らせでございます。」「言っておくれ。どういうことなの。」

22) *ouch nâhten im bæsiu mære. (3096)*

また、悪い知らせも彼に近づいていた。

23) *Sus reit sî verre durch diu lant, / daz sî der dewederz envant, /*
den man noch diu mære / wâ er ze vinden wære, (5761-64)

こうして彼女は遠い国々まで旅をして回ったが、その騎士も

10 『イーヴァイン』でも他に375, 3728などに見られる。

見つからず、どこで会えるかという情報も得られなかった。

24) swaz ich guoter mære / von iu vernime, des vreu ich mich.

あなた様について何かよいお便りでも聞ければ、(5922-23)

私は嬉しゅうございます。

20) は18) と同じように daz 文でその内容を規定された話なので、単数でもよさそうだが、複数になっており冠詞が付いていない。この場合も単数と複数の意味の違いはなさそうである。これは Nhd. ならもちろん単数になる。

21) には mære が二度行中に現われ、あとのほうは形容詞の語尾から中性の複数であることは間違いないが、最初の mære は付加語がないので形からは見分けが付かない。しかしこの疑問文に対して複数の guotiu mære で答えているし、また、waz 文中で waz にかかる部分の 2 格であることは確かである。waz や swaz で始まる文中の 2 格は単数も複数もあるが、この個所についてはベヒ (F. Bech) も was に従属する複数 2 格であると脚注で述べている¹¹。このようなことから、ここも 24) の guoter mære も女性ではなく、中性複数の 2 格であろう。

22) は愛妻からもらった 1 年の猶予期間が過ぎたことに気づいたイーヴァインが彼女への想いに駆られ悄然と打ち沈んでいるところへ、彼女からの絶縁の知らせが届くことになる直前の場面である。この個所は第 6 版までは ouch nâht im bæse mære と単数であったのを、ヴォルフ (L. Wolff) が第 7 版で写本 Bc に従い、上のような複数に変更した。すでにベヒとヘンリツイ (E. Henrici) は複数形を採っている。次に示すように単数の方が強弱交代のスムーズなリズムであるが、複数でも韻律法上は許容範囲である。「知らせ」の意味では複数が適当なのだろうか。

ouch nâht im bæse mære

x | ẋ x | ẋ x | - | ẋ^ |

ouch nâhten im bæsie mære

x | ẋ ∪ ∪ | ẋ x | - | ẋ^ |

11 Vgl. Anm. zu 2206 von Bech.

mære に冠詞が付かず、付加語があっても語尾のない場合単数か複数か区別がつかないけれども、上のようなことから次の例も複数とみなすべきであろう。ベネッケもここを複数の項に分類している¹²。

25) got der müeze vüegen in / des morgens bezzet mære /

danne er getrœstet wære. (6584-86)

彼 [=イーヴァイン] に約束されていたよりももっとよい知らせを神が彼らに翌朝お与え下さるように。

「使者の伝言」 *Botschaft* の意味の *mære* も広くこの項目に分類されるだろう。この意味では次の1例のみしか見られない。

26) dô er in tôten vant / und iuch in selher swære, /

do versweic er iuch daz mære / (1834-36)

その使者は、殿様が死んであなたがこれほど悲嘆に暮れておられるのを見て、あなたにその用向きを言わないで、

ここは女主人のイーヴァインに対する憎しみを捨てさせるために言ったルーネテの言葉の一部である。「いつまでも王の死を嘆き悲しんでばかりいると、いつ敵が攻めてくるとも限らない。亡き王に代わって国を守れるだけの勇士を早く見つけないと大変なことになる。事実、アルトゥース王が軍を率いてやってくるということを告げる使者が来ている」と言って女主人の翻意を促すくだりである。

4. 噂や評判、名声 *Gerücht*, *Ruf* の意味の *mære*

mære はまた、人々の間に流布している *Gerücht* 「噂」や *Ruf* 「評判」をも意味する。この意味では単数、複数それぞれ1例ずつ見られる。

27) daz was ein gengez mære / in allem dem lande. (3374-75)

12 Benecke, Wörterbuch zu Hartmanns Iwein, S. 141.

これは国中で広く噂になっていることであった。

- 28) ich möhte mittem muote / mit lîbe und mit guote /
 gevrumet hân diu mære / daz ich erkander wære. (5513-16)
 私はもっと名が知れ渡るように、しっかり心がけ、命をかけ、
 財を使ってでも私の名声を高めておくべきでした。

27) の *mære* は、愛する妻との絶縁を言い渡されたイーヴァインが、アルトゥース宮廷から出奔し行方不明になっているという噂である。この *mære* も前行の *wære* と韻を踏んでいる。

28) は、そのショックのあまり狂気に陥っていた主人公が、ナーリゾンの婦人がもつ秘薬のおかげで回復したあと、竜との戦いの中で救った獅子を伴い、無名の戦士として、妻への裏切りを償う旅に出る。その途上、自分のせいで裏切り者の廉で告発され、火あぶりの刑に処せられることになっていた恩人ルーネテを、獅子の助けを得て告発者である内膳守3兄弟を倒して何とか救い出したが、鎧兜に身を固めていたとはいえ愛する人から夫のイーヴァインだと分かってもらえず、傷を負ったまま悄然とその場を立ち去るときの言葉である。ここは中性の複数になっており、ここも *wære* と押韻している。

辞書で「噂」や「名声」の意味に分類されたところに、単数の例27)と並べて『イーヴァイン』からさらにこの例が挙げられている¹³ので、この場合も単数でも複数でもとくに意味が異ならないようである。

5. 漠然とした事情、消息 *Auskunft*, *Bescheid*, *etwas* の意味の *mære*

さて、*mære* は上で見たような本来の具体的な意味が薄れ、漠然とした事情 *Auskunft* を表わしたり、後に続く副文を先取りする *ez* や *daz* に近い役割をすることもある。

- 29) dô er sweic, do versprach ich mich / daz er ein stumme wære,/
 und bat mir sagen mære. (480-82)

13 BMZ, II¹, 73b, 41ff.

彼が黙っているのもものを言えないのかと思ったのですが、
それでも私に何か話してくれるよう頼んでみました。

- 30) doch sag ich dir ein mære, / wil dû den lîp wâgen, /
sone darftû niht mê vrâgen. (550-52)
しかしひとつお前に教えてやろう。お前が命をかけるつもりなら
これ以上は尋ねるにはおよばない。
- 31) und geloubet mir ein mære: / ê ich iuwer enbære /
ich bræche ê der wîbe site: (2327-29)
私の言うことをお信じ下さい。あなたを諦めるくらいなら、
女のたしなみをも破りましょう。
- 32) ouch sag ich iu ein mære:
swie schalkhaft Keiî wære, (2565-66)
しかし私はひとつだけ皆さんに申し上げよう、
たとえカイイーがどれほど意地の悪い人であっても、

29) はカーログレナントが冒険を求めてブレイリヤーンの森に分け
入ったときの出来事である。彼は毛むくじゃらで、剥いだばかりの獣の
毛皮を身にまとった恐ろしい形相の男と出会い、何も言わない相手に恐
る恐る声をかける。*mære*にはクラーマー、ヴェールリとも *Auskunft* とい
う訳語を与えている。ベヒもこの個所に *Auskunft geben* の意味であると
注を付けている。この *mære* は単数なのか複数なのか、形からは見分け
がつかないが、ベネツケは『イーヴァイン辞典』で複数のところに分類
し、*bat mir sagen mære* を *tat ein paar Fragen* の意味だとしている¹⁴。

30) はそんな野獣のような男に、冒険の旅に出て一騎打ちができる相
手を探していることを話したカーログレナントに、森の男が答えた言葉
である。この *ein mære* は何か特定の話ではなく、「あること」、「ある情報」
とでもいう内容である。*ein mære sagen* にふたりの訳者はそれぞれ *etwas*
sagen, *Bescheid sagen* を当てている。31)、32) では *ein mære* で次の文を
先取りしている。これらの *mære* はこのように、まったく意味がないと
いう訳ではないが、名詞本来の意味が薄れ押韻する役割を果たすために

14 Benecke, Wörterbuch, S. 140.

用いられていると言える。これに対し行中では「ひとつ言う」の意味で *mære* ではなく、次のように *dinc* を用いた別の表現もある。

33) eins dinges ich dich tröeste: (146)

ひとつだけそなたにはっきり言っておきましょう。

34) iu sî doch ein dinc gesaget, (1820)

それでもひとつだけ申し上げておきましょう。

33) の例では同じような表現で韻を踏むのに *sagen* の代わりに *tröesten* が使われているが、この動詞は人の 4 格と事の 2 格をとって「人に事を断言する」の意味である。34) では *ein dinc* が主語で *sagen* の受動の要求話法になっている。このように詩人はリズムを整え押韻するためにさまざまな表現の可能性を駆使するのである。

6. 名詞本来の意味をもたず統語上とくに必要でなく、押韻のために利用された *mære* の用法

mære は動詞 *sagen*, *wizzen*, *hœren*, *vrâgen* などの目的語になり、それ自体ほとんど意味をもたず、ただ後に続く間接疑問文や *daz* 文を先取りするだけのことがある。この場合 *mære* は押韻のために用いられているのである。先ず、*sagen* の例から見ていこう。

35) nû saget er im mære / wie er worden wære /

herre dâ ze lande. (2613-15)

そこで彼はアルトゥース王に、自分がどのようにしてこの国の主になったのか [そのいきさつ] を話した。

ここは、冒険に失敗した従兄弟カーログレナントの仇討ちに成功し、アスカロンを倒して森の国の主になった顛末を、あとから騎士たちを連れてやってきたアルトゥース王にイーヴァインが話す場面である。この例では *mære* はまったく意味がない訳ではないが、統語上不要であり、

mære なしに *wie* 以下の間接疑問文を直接 *sagen* の目的語に当たる文としてもいいが、それでは行の韻律が整わず、押韻するために *mære* が入れられている。ふたりの訳者とも *mære* の意味はまったく出さず、*mære sagen* を *erzählen* と訳している。この *mære* もベネツケは複数に分類している。しかし、次の例は同じような表現が受動文になったもので、間接疑問文を先取りする主語 *mære* は動詞 *was* からすると明らかに単数である。

- 36) *ouch was in niuwelîchen geseit / von dem risen mære, /
wie er erslagen wære, / den der rîter mittem lewen sluoc. (5682-85)*
また宮廷の人々に、最近、獅子を連れた騎士が打ち倒した
大男について、その討ち果たされた様子が伝えられた。

もし *mære* が複数なら動詞は当然 *wâren* となり、韻律上はその部分が強弱交代のタクトから分割弱音になるだけで、とくに問題はない。ところが、この個所についてはベネツケやヘンリツイの写本一覧には何の表記もなく、*wâren* としている写本はないようである。ここが単数で例29) と35) の *mære* を複数として区別する理由はまったく分からない。

次に *mære* が *wizzen* の目的語になっているのが1例あるので、これを見てみよう。この *mære* もベネツケは複数の項に入れている。

- 37) *wolde si wizzen mære / war er gekêret wære, (5879-80)*
もし彼女が、彼がどこへ向かったのか知りたいと思うならば、

この *mære* は直後の間接疑問文を先取りするもので、ふたりの訳者はそれぞれ訳語として *Auskunft*, *Nachricht* を当てているが、*mære* が意味の上からはとくに必要ではなく、これもただ押韻に利用されただけであることは、*mære* がなく *wizzen* が直接、目的語として間接疑問文をとっている10) の例からも明らかである。ここにもう一度それを挙げて確認しておこう。

- 10) *er erkand in bî dem mære,*

und enweste doch wer er wære. (5697-98)

彼はその話を聞いてその騎士のことを知ったが、
しかしそれが誰なのか分からなかった。

ここでは wizzen の直説法 3 人称単数過去形に否定辞 en- が付いた enweste に間接疑問文が目的語として mære を介さず直接続いている。

mære はまた、hœren の目的語にもなって、それ自体意味がなくただ次の間接疑問文との仲立ちをすることがある。

38) daz man noch wîp enweste wâ / und niemer gehôrte mære /
war er komen wære. (3218-20)

彼がどこにいるか誰も知らず、彼がどこへ行ったのかも
けっして聞かれない（ようなところへ行くことを切に願った。）

エーレクのように妻への愛に溺れて騎士の務めをないがしろにしないように、という親友ガーヴァインの勧めに従って、妃から一年の期限をもらってイーヴァインは一旦アルトゥース宮廷に戻る。ところが、比武にうち興じるあまり、期限が過ぎたところへ妃から使者として送られたルーネテから、妃との絶縁を言い渡される。絶望したイーヴァインは誰にも知られないところへ人知れず身を隠したいと切望する。上の例の mære も 37) の wizzen の場合と同じように、hœren の目的語としては次行の間接疑問文だけで十分であるが、押韻するために mære がつなぎに用いられているのである。ここもベネツケは複数とみなしている。

同様に mære はそれ自体にほとんど意味がなく、動詞 vrâgen の目的語として現われることも多い。辞書の分類¹⁵では vrâgen は人の 4 格の他に 2 格あるいは前置詞 von あるいは間接疑問文を伴うことがあるが、『イーヴァイン』では人の 4 格以外に 2 格の mære を目的語にとる vrâgen は次のように 5 例見られる。

39) und vrâget in der mære / wie er dar komen wære. (3623-24)

15 Vgl. BMZ, III, 391b, 23-392a, 12.

x | ́ x | ́ x | ́ | ́ x ^ |

そして彼にどうしてここへ来たのかを尋ねた。

- 40) *dô vrâgte er den wirt mære, / waz im geschehen wære.* (4433-34)

そこで彼は城主に、彼の身に何が起こったのかを尋ねた。

- 41) *und vrâgte sî mære / waz ir gewerp wære.* (5817-18)

x | ́ | ́ x x | ́ | ́ x ^ |

そして彼女に旅の目的が何なのかを尋ねた。

- 42) *und vrâgete sî mære / ob in iht kunt wære /*

x | ́ x x | ́ x x | ́ | ́ x ^ |

umb in den sî dâ suochte. (5937-39)

そして彼女が探している人について

彼らが何か知らないかを彼らに尋ねた。

- 43) *von den ellenden / wolt er den portenære /*

gerne vrâgen mære, (6234-36)

この哀れな婦人たちについて、彼は門番の男に

尋ねてみようと思った。

これら5例中4例では人の4格と *mære* のあとに間接疑問文がきており、43) だけは間接疑問文でなく前置詞 *von* で尋ねる内容を表わしている。*mære* に冠詞が付いたのは39) の1例だけだが、行の下に韻律を示したようにこれはリズムを整えるためと考えられ、冠詞があるなしは統語的に何も関係がなさそうである。クラーマーはここを *und fragte ihn danach, wie ...*, ヴェールリは *und erkundigte sie sich, wie ...* と訳している。その他の例の *mære* には *Auskunft* という訳語を与えているが、これらの *mære* は押韻の役割を果たすために用いられているので、必ずしもそれは必要でないだろう。例43) 以外は *mære* の相手はやはり *wære* である。

ところで、韻律の観点からすると41) の例でも、写本Bには *si* のあとに冠詞 *der* があるので、それに従った方が次のように語尾 *-e* に二次強音を置く必要がなく、強弱交代のスムーズなリズムになるのに、どの刊本でもそうになっていない。語尾に二次強音を置くこともそれほど違和感がないのであろう。

und vrâgte sî der mære

x | ẋ x|ẋ x | ˘ |ẋ^|

これらのmæreは女性名詞とすれば、単数か複数か区別できないが、これまで見てきたように『イーヴァイン』では他の例はすべて中性名詞とみなされるので、この5例だけ女性とするのは不自然である。中性であればこれらのmæreは複数である。そうすると29)、35)、37)、38)の場合も中性の複数とみなすことができるだろうが、36)だけなぜ単数であるのかは依然として謎である。

上で見たように、mæreが間接疑問文を形式的に受ける場合、間接疑問文が後に続くことが多いが、順序が逆になって間接疑問文が先に置かれて、それをあとでmæreによって受け直す場合も次のように1例ある。

44) waz uns arges werre, / der mære endurfet ir niht gern.

|ẋ x | ẋ x | ˘ |ẋ^| x | ẋ x | ẋ x|ẋ x | ẋ ^|

私たちがどんな災いが苦しめているのか、(4442-43)

そんなことは聞きたがらない方がよい。

ここでは間接疑問文が先に置かれてそれを複数の2格der mæreが受け直し、動詞gernの目的語になっている。統語的には中性の指示代名詞2格desでもよさそうであり、もしder mæreの代わりにdesを使えば、この行の始まりの行首余剰音 (Auftakt) がなくなるだけで、韻律上も問題はない。しかしそうならないところを見ると、このmæreには多少の意味が含まれているのかも知れないが、これも複数で行中である。

さて、次のふたつの例もmæreには本来の意味がなく、ただ韻律上の理由でこのような表現になっているに過ぎないようである。mæreのきわめて稀な用例である。

45) und ob er ie rîter wart / und alle sîn umbevart /

die heter in dem mære / als ez im getroumet wære. (3565-68)

自分がかつて騎士であったこともこれまでのすべての遍歴も彼にはまるで夢を見ていたことのように思われた。

- 46) als mir der arge schalc gehiez / der mich in die burc liez, /
des wirtes portenære, / unde ouch nâch dem mære /
als mir die vrouwen hânt gesaget. (6561-65)
城主の門番で、私をこの城の中へ入れた
あのよこしまな悪党が私に予告したことからすると、
また、私にあの婦人たちが話したことからしても、

これらの個所は非常に難しいところである。45) の *heter in dem mære* については辞書に *sah er an* の意味だとあり¹⁶、クラーマーもそれに従って *sah er so an, als habe er sie geträumt* と訳している。ヴェールリは *davon meinte er, er habe es geträumt* と意識している。

46) についても辞書は *zufolge dessen was* の意味だとしている¹⁷。この個所はこの例の1行目の *als mir der arge schalc gehiez* とまったく同じ構文だが、ここでは行を満たし押韻するために、様態を表わす *als* に導かれた副文を先取りする前置詞句 *nâch dem mære* を入れているのである。ヴェールリは *als* 以下を関係文として *und auch nach der Geschichte, die mir die Damen erzählt haben* として、巧みに *mære* の訳を出しているが、これは苦肉の策である。この2個所はちょうど37) と10) の *wizzen* の例と同じような関係である。

おわりに

『イーヴァイン』に現れる名詞 *mære* の全用例を取り出してその用法を、意味および韻律上の必要性からの冗語的役割に分類して詳細に検討してきたが、その特徴をまとめてみよう。

名詞 *mære* はもちろん本来の意味で用いられることがふつうであるが、とりわけ人が他者に語り聞かせる「話」*Geschichte* の意味が最も多く14例見られる。この場合は単数形がずっと多く、10例であり、複数は「いろいろな話」という本来の複数が1例のみであり、あとの3例は「ある

16 BMZ, II¹, 76a, 3-4.

17 BMZ, II¹, 76a, 14-16.

特定の話」を意味するので単数との違いが明確でない。これらの *mære* はふたりの訳者によっても単数で訳されている。

宮廷で語られる韻律を整えた「騎士物語」もこのような「話」であるが、一方、人を通して伝えられる「知らせ」や「情報」*Kunde, Nachricht* さらに「使者の伝言」*Botschaft*ともなる。この意味では複数が多く、複数7例に対し単数は4例である。ただし、これも *Nhd.* の感覚ではなぜ複数になるか分からない。ふたりの訳者もすべて単数で表わしている。

人が伝える情報から *mære* はまた、一般に広く世間の人々が口にする「噂」や「名声」ともなる。この意味では単数、複数ともそれぞれ1例ずつあるが、これも *Nhd.* では単数で表わすところであり、なぜ複数になっているか分からない。

mære は具体的な意味が薄れ、漠然とした事情や消息を表わしたり、副文を先取りする *ez, daz* に近い役割をすることになり、それがさらに、統語的には不必要で単に韻律を整え押韻するのに利用されることにもなる。この用法では単数3例に対し複数は9例を数える。

単数と複数の区別は付加語が付かなかったり、付加語があっても語尾がない場合にはできないことも多いが、この作品ではおおむね、「知らせ」の意味およびほとんど意味がなく韻律上、冗語的に置かれているところでは複数形が多いと言える。また、押韻に関しては単数がすべての用例で *mære* が行末に来ているのに比べ、複数では23例中6度行中に現れている。押韻個所での *mære* の相手は動詞 *wesen* の接続法過去単数形 *wære* が圧倒的に多い。*mære* は45例の中で39度行末に置かれ、そのうち29例で *wære* と韻を踏んでいる。ここでは例に出さなかったが、3例の形容詞 *mære* も行末に現れ、そのうち2度は押韻相手が *wære* である。

最後に名詞 *mære* の意味ごとの用例数と押韻相手とその個所を一覧表で示して、この小論を閉じることにしよう。

『イーヴァイン』における名詞 *mære* の用法

表 1 : *mære* の用法上の分類

a) <i>Geschichte</i> の意味 : 単数 10 + 複数 4 = 14 例
b) <i>rhythmisch erdichtete Erählung</i> の意味 : 単数 2 例
c) <i>Kunde, Nachricht, Botschaft</i> の意味 : 単数 4 + 複数 7 = 11 例
d) <i>Ruf, Gerücht</i> の意味 : 単数 1 + 複数 1 = 2 例
e) 漠然とした <i>Auskunft, Bescheid, etwas</i> の意味 : 単数 3 + 複数 1 = 4 例
f) 統語上とくに必要でなく韻律のために利用された <i>mære</i> : 単数 3 + 複数 9 = 12 例

表 2 : *mære* の押韻個所

押韻 (39) :	
<i>wære</i> (29)	: 56. 185. 226. 238. 482. 550. 1995. 2219. 2533. 2565. 2613. 2847. 3073. 3096. 3219. 3374. 3567. 3623. 4273. 4433. 5515. 5683. 5697. 5763. 5817. 5879. 5937. 6585. 8028.
<i>enbære</i> (2)	: 2327. 4528.
<i>Ouwære</i> (1)	: 30.
<i>portenære</i> (2)	: 6236. 6564.
<i>swære</i> (5)	: 93. 892. 1836. 4303. 5922.
非押韻 (6)	: 796. 2206. 2207. 4443. 5855. 6079.

テキスト

Hartmann von Aue: *Iwein*. Text der siebenten Ausgabe von G. F. Benecke, K. Lachmann und L. Wolff. Übersetzung und Anmerkungen von Thomas Cramer, zweite, durchgesehene und ergänzte Auflage. Berlin / New York 1974

Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von K. Lachmann, Übersetzung von P. Knecht, Einführung zum Text von Bernd Schirock. Berlin/ New York 1998

Das Nibelungenlied. Nach dem Text von K. Bartsch und H. de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von S. Grosse. Stuttgart 1997

主要参考文献

Bäumli, F. H. / Fallone, E.-M.: *A Concordance to the NIBELUNGENLIED (Bartsch-De Boor Text)* Leeds 1976

Benecke, Georg F. / Müller, Willhelm / Zarncke, Friedrich: *Mittelhochdeutsches*

- Wörterbuch, I-III*; Reprographischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-66, Hildesheim 1963 (= BMZ)
- Benecke, Gerog F.: *Wörterbuch zu Hartmanns Iwein*. 3. Ausgabe, besorgt von C. Borchling Leipzig 1901
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Herausgegeben von Fedor Bech, Leipzig: F. A. Brockhaus 1869 (Deutsche Ckassiker des Mittelalters. 6. Band: Hartmann von Aue. 3. Theil)
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Mit Anmerkungen von G. F. Benecke und K. Lachmann, 6. Ausgabe, unveränderter Nachdruck der 5., von Ludwig Wolff durchgesehenen Ausgabe, Berlin 1966
- Hartmann von Aue: *Iwein Der Ritter mit dem Löwen*. Herausgegeben von Emil Henrici, 1. Teil: Text, Halle a. S. 1891
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von M. Wehrli. Zürich 1988
- R. A. Boggs: *Hartmann von Aue Lemmatisierte Konkordanz zum Gesamtwerk*. Nendeln 1979 (Indices zur deutschen Literatur 12/13)
- Hall, C. D.: *A complete Concordance to Wolfram von Eschenbachs Parzival*. New York / London 1990
- Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 20. Auflage von Hugo Moser und Ingeborg Schröbler. Tübingen 1969
- Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 25. Auflage, neu bearbeitet von Thomas Klein, Hans-Joachim Solms und Klaus-Peter Wegera Mit einer Syntax von Ingeborg Schröbler, neubearbeitet und erweitert von Heinz-Peter Prell. Tübingen 2007
- 武市修 『中世ドイツ叙事文学の表現形式』 —押韻技法の観点から—、近代文芸社、2006年

Zum Gebrauch vom Substantiv *mære* im Iwein

— unter besonderer Berücksichtigung der Endreimdichtung —

Osamu TAKEICHI

Das mittelhochdeutsche *mære* kommt aus dem althochdeutschen *mâri*, das eigentlich ein Adjektiv mit den Bedeutungen von „bekannt, berühmt, beachtenswert usw.“ ist und auch substantiviert gebraucht wird. Was das Geschlecht des Substantivs *mære* betrifft, so scheint das Femininum zuerst im Mitteldeutschen weit um sich gegriffen zu haben. Es erscheint auch im Parzival vereinzelt. Aber meistens wird dieses Substantiv als neutrales Wort behandelt und kommt häufig auch im Plural vor. In sehr vielen Fällen ist es allerdings schwierig, Singular und Plural sowie die Genera zu unterscheiden, weil deren äußerliche Unterscheidungszeichen oft nicht vorhanden oder unklar sind. Dieses Wort dient manchmal zum Reimen, aber auch in diesem Punkt verhält es sich je nach Werk sehr verschieden. Zum Beispiel steht *mære* im Parzival 80mal von 171 Belegen am Versende, während es im Nibelungenlied nur ein einziges Mal von 166 Belegen reimt.

In der vorliegenden Arbeit werden die Gebrauchsweisen dieses Wortes im Iwein untersucht, wobei alle 45 Belege entsprechend fünf verschiedenen Bedeutungen im engeren Sinne und einer anderen syntaktischen Funktion in sechs Gruppen gegliedert werden.

1. Geschichte, die man den anderen erzählt

Da diese Bedeutung die eigentliche vom Substantiv *mære* ist, ist der Prozentsatz der Belege hoch: In dieser Bedeutung erscheint *mære* zehnmal im Singular und viermal im Plural. Unter den vier pluralischen Belegen gibt es aber nur einen, der dem neuhochdeutschen Plural entspricht:

sus vertriben sî beide / mit niuwen mæren den tac. (6078-79)

Unter den anderen drei Belegen kann man nach dem neuhochdeutschen Sprachgefühl deren Genusunterschiede gar nicht erkennen. Zum Beispiel ist dieselbe Geschichte von *Kâlogrenant* je zweimal im Singular und im Plural ausgedrückt. Je ein Beispiel sei hier gezeigt:

*nû bitet in sîn mære, / des ê begonnen wære, /
durch iuwer liebe volsagen. (185-87)*

*diu mære der ich laster hân,
daz ich diu niht kan verdagen: (796-97)*

Die Konstruktionen dieser beiden Sätze sind gleich: Das Substantiv *mære* wird je von dem Relativsatz bestimmt. *diu mære* im zweiten Beispielsatz könnte man ohne Probleme durch *daz mære* ersetzen. Dann würde das genitivische Relativpronomen in die Form *des*, und das Demonstrativ in *daz* gesetzt, ohne dass die Bedeutung geändert würde. Also kann man hierzu sagen, dass es zwischen beiden Genera keinen Bedeutungsunterschied gibt.

2. Rhythmisch abgefasste Erzählung

Für *mære* in diesem engeren Sinne findet man hier zwei Belege im Singular (Vers 30 und 56). E. Martin bemerkt über *disiu mære* an der Stelle 2, 7 vom Parzival, das pluralische *mære* bedeute allgemein „die Rede“, das gelte auch im Singular; mit letzterem werde aber besonders „die Geschichte“, die „Erzählung (die Fabel des Gedichts)“ bezeichnet, die unserem „Märchen“ entspreche.

3. Kunde, Nachricht, Botschaft

Zu dieser Gruppe gehören mehr pluralische Belege: siebenmal zu viermal im Singular. Der folgende Belegatz war bis zur 6. Ausgabe von G. F. Benecke und K. Lachmann im Singular, ist aber von dem Herausgeber L. Wolff erst in der 7. nach den Handschriften Bc in Plural

geändert worden, den F. Bech und E. Henrici schon früher in ihren Ausgaben gewählt haben.

ouch nâht im bæse mære (3096 bis zur 6. Ausgabe)

ouch nâhten im bæsiu mære (in der 7. Ausgabe)

Diese Änderung ist deshalb angebracht, weil *mære* in diesem Sinn mehr im Plural erscheint, obwohl dieser Plural für das neuhochdeutsche Gefühl befremdend ist, was auch der folgende, durch einen *daz*-Satz bestimmte Fall erkennen lässt:

*dem brâhtes bæsiu mære, / daz ir vrouwe wære /
unbekêriges muotes: (1995-97)*

4. Ruf, Gerücht

mære im Sinn von „Gerücht, das unter den Leuten in Umlauf ist“, im Singular und im Plural je einmal belegt. Hier gibt es auch keinen Unterschied zwischen den beiden Genera.

5. Vage Bedeutung von „Auskunft, Bescheid, etwas“

Manchmal wird *mære* in seinen eigentlichen Bedeutungen geschwächt und bezeichnet „vage Auskunft“. Es nähert sich manchmal dem Personalpronomen *ez* oder dem Demonstrativum *daz*, welches auf einen nachfolgenden Nebensatz hindeutet. *mære* in dieser Funktion erscheint dreimal im Singular und einmal im Plural. Das folgende Beispiel von *mære* ohne Beiwort könnte man vielleicht zum Singular rechnen. Dann wären hier alle vier Belege singularisch.

*dô er sweic, do versprach ich mich / daz er ein stumme wære,
und bat mir sagen mære. (480-82)*

Dieses *mære* geben F. Bech, Th. Cramer und M. Wehrli alle durch „Auskunft“ wieder. E. Henrici zitiert die Interpretation von G. F. Benecke: „da kam ich auf den gedanken, er könne vielleicht stumm sein, und um darüber zur gewissheit zu kommen, richtete ich eine frage

an ihn.“ Benecke selbst aber gliedert in seinem Wörterbuch zu Iwein diese Stelle in die pluralische Gruppe ein und gibt eine andere Interpretation „tat ein paar Fragen“. *mære* ohne Attribut ist doch nicht immer pluralisch, wie man dem folgenden Beispielsatz entnimmt.

*ouch was in niuwelîchen geseit / von dem risen mære,
wie er erslagen wære, / den der rîter mittem lewen sluoc.*

(5682-85)

Dieses Beispiel ist der passivische Ausdruck des oben angeführten „*mære sagen*“, deshalb könnte auch jenes *mære* singularisch sein. Außer zwei durch das Finitverb unverkennbar singularischen Belegen rechnet Benecke alle anderen Belege von *mære* als Objekt und ohne Beiwort zu der pluralischen Gruppe, aber das kann man nicht mit Gewissheit erklären.

6. Syntaktisch unnötiges, fast nur zum Reimen benutztes *mære*

mære wird manchmal Objekt von Verben wie *sagen*, *wizzen*, *hœren*, *vrâgen* und nimmt deiktisch einen indirekten Fragesatz oder *daz*-Satz auf, wobei es an sich fast keine Bedeutung hat und nur zum Reimen dient. Den letzten Beleg kann man wahrscheinlich für ein solches Beispiel halten. Einschließlich dieses Beispiels erscheint *mære* in dieser Funktion neunmal von zehn Belegen im Plural. Hier sei ein weiteres Beispiel mit *wizzen* gezeigt. Diese Verhältnisse verstehen sich im Vergleich des danach stehenden Beispielsatzes ohne solches *mære*.

*wolde si wizzen mære / war er gekêret wære, (5879-80)
er erkand in bî dem mære, und enweste doch wer er wære.*

(5697-8)

In dieser Funktion tritt *mære* weiter zweimal in der Präpositionalphrase im Singular auf. Eins davon sei angeführt.

*als mir der arge schalc gehiez / der mich in die burc liez, /
des wirtes portenære, / unde ouch nâch dem mære /
als mir die vrouwen hânt gesaget. (6561-65)*

In diesem Beleg spielen die beiden mit der Konjunktion *als* eingeleiteten Sätze die gleiche Rolle. Aber vor dem zweiten Satz ist die Präpositionalphrase *nâch dem mære* eingesetzt und nimmt den zweiten *als*-Satz kataphorisch auf, um mit dieser Phrase den Vers richtig zu füllen und einen Reim zu bilden.

Zum Schluss seien die Reimbezüge von *mære* erwähnt. Von den 45 Belegen dient *mære* 39mal zum Reimen. Seine Reimpartner sind 29mal *wære*, Konjunktiv Präteritum von *wesen*, fünfmal *swære*, je zweimal *enbære* und *portenære* und einmal *Ouwære*. Sechs ungereimte Belege sind alle pluralisch. Der Prozentsatz der gereimten Belege beträgt 86,7 %. Im Vergleich mit dem Parzival, wo *mære* in 46,8 % aller Belege ans Versende kommt, spielt es im Iwein reimbezüglich eine größere Rolle.